



今日の非常識は明日の常識になりうる。人間は生まれつき利己的だというのは、現在の常識である。著者は逆にほとんどの人間が善だと信じる。キリスト教や啓蒙主義は、原罪や墮落という言葉で人間性について暗い見方を示してきた。しかし、目的的手段を正当化すると信じたマキャヴェッリの厚かましさを、実際にキャンブで試すと、こうした小社会は傲慢さを許さないことに気がつくものだ。小社会で権力を手に入れるのは、いちばん親切で共感力のある人であり、最も友好的な人が

Humankind 希望の歴史(上・下)

ルトガー・ブレグマン著



「共感」より役立つ「思いやり」

生き残る。ブレグマンは「わたしたちが、大半の人は親切で寛大だと考えるようになれば、全てが変わるはずだ」という期待からこの書物を書いたのである。著者に従って、他人に疑いを

抱いた時には「最善を想定」すれば、相手がちうらを欺こうとしている場合であっても、こちらの「非相補的行動」によって相手も態度を変えられる可能性がある。良いことをすると気分がよ

くなるのは、すべての人が何らかの意味で勝者になる理屈にも通じる。著者は、万能だと自負する経営者や政治家やジャーナリストにもっと質問を浴びせるべきだと提案する。テレビで難民がインタビュされる光景を見ないのは、民主主義とジャーナリズムがたいてい一方通行になっているからだ。確かにカプール空港周辺で飛行機に乗り組む機会を必死にうかがうアフガン人にインタビュする光景を

見たことはない。結局、未来に向けた希望で大事なものは、他者の苦悩を自分も経験する「共感」よりも、苦悩を理解し行動するために役立つ「思いやり」なのである。共感

原題—HUMANKIND (野中香方子訳、文芸春秋・各1980円)
▼著者は88年生まれ。オランダ出身の歴史家、ジャーナリスト。著書に『隷属なき道』など。

と違って思いやりはこちらのエネルギーを消耗させない。優しさや気遣いは思いやりを呼び起こし、人間の可能性を豊かにして他人の理解をたやすくする。テレビのニュースをあまり見ずに、繊細な新聞の日曜版や、もっと掘り下げた書物を読むことも大事だと著者は説く。優しさや思いやりは伝染しやすく、速くから眺めている人にまで広がる。親切な行動は人々を驚かせ、感動させるだろう。

こうしてブレグマンを読み進めると、江戸期の石田梅岩の「心学」をつい思い出してしまふ。日常で実践できる善意の道徳観を説く著者は梅岩を読んだ形跡がない。日本人なら2人を比較した読書も楽しめるだろう。

《評》武蔵野大学特任教授

山内 昌之